

「小笠原混合言語」は本当に「言語」なのか — 5つの側面からの検証 —

ロング, ダニエル

要旨

東京都の小笠原諸島に見られる多文化・多言語の接触状況は、一般には知られていないが、日本の言語政策では重要な位置を占めてきた(田中 2005)。小笠原では英語と日本語が混ざり合うことばが欧米系島民同士の間で使用されている。これまでその言語使用に関して島民が「英語と日本語を混ぜて使う」のような表現が用いられてきたが、小笠原で話されていることばは英語と日本語のコードスイッチングではなく、むしろ二つの言語の融合によって誕生した新たな言語体系であると筆者は考えている。すなわち、欧米系島民は日本語と英語を使うバイリンガルではなく、これら以外にも「小笠原混合言語」を使うトライリンガル(3言語使用者)であると考えられる。つまり、日本の少数民族に当たる彼らの言語はアイヌ語や琉球諸語とならぶ日本のマイノリティ(少数派)言語であると言える。

[キーワード] 多文化接触、言語接触、日本の少数派言語、3言語使用、
コードスイッチング

1. 概説

小笠原諸島の欧米系島民同士では「英語と日本語が混ざっていることば」(以下、「小笠原混合言語」と呼ぶ)が使われる。本稿で「小笠原混合言語」は本当に一つの言語体系であるかどうかを検証する。「混合言語」とは接触言語の一種であるが、ピジンやクレオール、コイナー、ネオ方言など、これまで注目されてきた接触言語とは異なるものである(ロング 2010)。一方、コードスイッチング(コード切り替えなどとも言う)という言語行動の現象とも異なるものである。「混合言語」(Mixed Language)という概念はBakker(1994)が提唱したものである。「混合言語」の研究は言語接触、さらには言語習得やコードスイッチングの理論構築にも大きく貢献する概念として注目されているのである。

小笠原諸島の言語状況を知るためには歴史的状況を把握する必要がある。言語状況を考えて、次の4期に分けることができる。

第1期(1830~1876年) 無人島に欧米人や太平洋諸島民が入植、様々な言語が接触する。

第2期(1876~1945年) 日本の領土となり、日本人の入植による日本語との接触が起こり戦後の混合言語の前身が形成される。²

第3期(1946~1968年) 米軍施政下での英語の教育と使用が盛んになり、戦前からみられ

た混合化が進み、本格的な混合言語の言語体系へと発展する。

第4期（1968年～現在）日本へと返還され、内地での生活を余儀なくされていた旧島民が帰島し、再び日本語が優勢言語となる。

小笠原欧米系島民が話す英語と日本語が混ざっていることばは、度々単なるコードスイッチングと言われてきている。しかし、以下で「小笠原の混合言語」はまさに言語体系であると主張する。本稿では、言語意識面、言語使用面、言語能力面、言語習得面、言語構造面の五つの観点からの議論をしていく。

2. 言語意識面

小笠原混合言語を島民の意識から考えると一つの言語体系であると結論付けることができる。ここでその意識面の要因を一つずつ取り上げてみる。

これまで、多くの研究者が小笠原の言語状況を単なるコードスイッチングとして捉えてきた。確かに、欧米系島民に尋ねれば、自分たちは「英語と日本語をミックスしているだけだ」と語る人は少なくない。この意識だけをみれば、本稿で唱えている「言語説」の論証としては弱い。しかし、言語意識の別の側面を見ると、「英語と日本語をただ混ぜているだけ」という自己評価と合わない部分が出てくる。

例えば、欧米系島民は自分たちのことばに対して「コンプレックス」（劣等感）を抱いており、「自分らが英語と日本語をミックスしているのが恥ずかしい」と語る。しかし、もし小笠原混合言語が単に「英語と日本語をミックスしている」行動だけだとしたら、混ぜるのを止めれば良いだけで済むであろう。彼らにとって小笠原混合言語は一つの言語体系であり、母語となっているから、恥ずかしく感じながらも、自分を表現する手段としてそれを使わざるを得ないのである。

なお、上で述べた一般的な見方（「ミックスしているだけだ」という意識）とは反対に、島民の中には小笠原混合言語を「自分たちが作った言語だ」と意識している人がいる³。ただし、こうした認識でいる人は圧倒的に少数派ではある。

もう一つの「意識面」における特徴は、島民が「自然に聞こえる」意識に対して「変に聞こえる」意識も持っている点にある。例えば、次の文法性判断調査を欧米系島民に対して行うとする。その時に別の欧米系島民が発した文「me らは all day 頑張った」を聞かせたら、「その言い方普通に使うね」と答える。すなわち肯定的な判断を下すのである。一方、英語と日本語が恣意的に混ざった文を聞かせれば「自分たちはそういう混ぜ方をしない」とか「それは sounds funny だよ」（おかしく聞こえるよ）という否定的な判断を下すのである。同じように、よその言語コミュニティ（例えば、関東や東海、関西などのインターナショナルスクールの生徒たちの間で普通に使われている言い方）を聞かせると、その混ぜ方は自分たちは言わないとはっきり主張するのである。例えば、日本語の動詞語幹＋英語の過去形「ガンバル

ed) のような言い方はよそのコミュニティで実際に行われているが、小笠原の人に尋ねると「そういう言い方を me らはできない」と答える。すなわち、英語ネイティブや日本語ネイティブのそれぞれが文法性判断ができるように、小笠原混合言語ネイティブの人々にも自分たちのことばに内在しているルールに基づく文法性判断ができるのである。なお、上記のように、欧米系島民の多くは「英語と日本語を単に混ぜているだけだ」という意識を持っているので、言語調査を通じて自分たちの混ぜことばにはこうした規則性があることをはじめて自覚して本人たちも驚くのである。

なお、ここで明確にしておきたいが、本論で使っている「小笠原混合言語」という名称はあくまでも筆者が議論を進めるための便宜上のラベルとして作ったものである。島民たちはこの名称を使っているわけではない。

名称はともあれ、もし彼らのことばが「単に混ぜているだけ」だったら、このように「使える混ぜ方」に対して「使えない混ぜ方」の判断そのものはできないはずである。小笠原混合言語は独自のルールが存在するからこそ、英語、日本語、中国語、スペイン語などほかの言語と同様「文法性判断」が可能である。

3. 言語使用面

言語使用という側面から考えても、小笠原の欧米系島民が話していることばは単なる「ミックス」やコードスイッチングではなく、一つの融合した言語体系であると言える。

小笠原混合言語は欧米系同士の間で使われるいわゆる「身内言語」(ingroup language) である。小笠原混合言語は英語と日本語が混ざっていることから、明治時代に島に入植して来た日系住民との間に発生したリングフランカだと誤解されやすい。しかし、小笠原混合言語はよそ者との間に使うコミュニケーション手段(=リングフランカ)ではない。それどころか、欧米系島民はよそ者の前で混合言語を使うのを恥ずかしがったり、嫌がったりするのが現状である。それに、もし欧米系島民が英語と日本語を別々のコードとして持っているのであれば、身内で話す時に二言語を混ぜる必要はない。彼らにとって混合言語はむしろ自分にとって最も自然に出る言語変種である。すなわち、社会言語学者ラボフの言う *vernacular* (日常語) に当たる。⁴ ラボフが言うには、ある集団が身内同士のくだけた場面で使う言語変種 (= *vernacular*) はその集団にとって最も自然に出ることばで、彼らの母語に当たる。小笠原混合言語がもし彼らの母語だとすれば、それは「言語」と判断せざるを得ないであろう。

4. 言語能力面

上記の言語使用面の証拠と関連があるが、言語能力面から考えても小笠原混合言語は単なるコードスイッチングではなく一つの言語体系であることが分かる。

米軍統治下に育ったネイビー世代と呼ばれる人たちの中には、英語よりも日本語が弱いと

嘆く人は少なくない (ロング 2002a: 303)。この「日本語が弱い」という表現は具体的に言えば次のことである。(1) 小笠原混合言語に含まれている八丈方言の要素と標準語との区別がよく分からない。(2) 敬語や丁寧語が満足に使いこなせない。(3) 日本語の読み書きはあまりできない、あるいはまったくできない。(4) 非日常的な高度な語彙を(英語で分かっているが)日本語で知らない。⁵

「日本語が弱い」と言う人がいるように、「英語がちょっと苦手だ」と嘆く個人もいる。欧米系島民の中には、日本語を混ぜずに英語だけをしゃべる時と、英語を混ぜずに日本語だけをしゃべる時の両方にことばが不自由な感じを相手に与える人もいる。⁶しかし、この両方の人たちは「英語と日本語が混ざっても構わないなら」自分を表現することになんらの不自由も感じないようである。「日本語と英語の混ざったしゃべり方で自分を満足に表現できない」なんて言う人も聞いたことがない。「混ざったことば」(つまり混合言語)は最も自由に物事について考えたり話したりすることのできる思考言語である。

明治時代に最初に英語と日本語を混ぜ始めた世代においては「第一言語である英語と第二言語である日本語を混ぜていた」という言い方は間違いではないが、1920年代から1960年代にかけて生まれ育ったほとんどの人は、むしろ「混ざったことばを第一言語として持っていた」という言い方が実態を正確に捉えているのである。「英語と日本語を混ぜてしゃべる」明治や大正生まれの話者⁷と「英語と日本語が混ざっている言語をしゃべる」昭和生まれの話者について考えるときに、「混ぜる」と「混ざっている」の他動詞・自動詞の使い分けが重要である。

5. 言語習得面

小笠原混合言語は一つの言語体系であるというもう一つの証拠は、言語習得面に見られる。上記の言語能力でも暗示されていることだが、ここで明示的に述べよう。

「日本語と英語を別々の言語体系として習得した後に、それらを習慣的にミックスするようになった」という誤った解釈をする研究がある。しかし、実際はそうではなく、融合型の言語体系である「小笠原混合言語」を第一言語として獲得しているのである。欧米系島民にとって混合言語は最初に習得した第一言語であり、英語はその後習った第二言語で、日本語はその後身につけた第三言語である。

こうしたことは島民の証言から分かる。

1929年生まれの瀬堀エーブルさんは家庭内で「日本語と英語をミックスした」と表現している。もちろん、彼が言っている「ミックス」とは戦後の混合言語のような組織化されたものかどうか分からない。むしろ、その前身に当たるもっと緩いミックスだったかもしれない。ただ、その言語は家庭内で使用していたため、第一言語的なインプットと言えよう。事実、1920年生まれの瀬堀ヘンドリック(通称ネケ)は年少期に家庭内で英語を話さなければ父親

に怒られたと語っている (ロング・今村・新井 2011: 38)。1908 年生まれの瀬堀ナサニエル (通称ナテ) も同じように語っている (Sampson 1968: 130)。つまり、この二人は家庭内で混合言語を使用していなかったと推測される。しかし、裏を返せば、家庭内においても日本語が出るがあったからこそ、こうした怒りに遭うことがあったであろう。

エーブルが成人して家長となった家庭の言語使用について聞かれたら次のように答えた。

ロング: 自分の子供と喋るときは何語で喋るんですか?

瀬堀 AS: あのお、English and Japanese.

ロング: Mixing them?

瀬堀: Mixed. Yeah, I talk mix, huh? そう。[中略] School は English school だからね、ここで返還する前ね。だから子供は英語でね、school 行くと。で、家に帰ってくると Japanese と English の両方ね、使ってたの。(ロング 2003a: 11)

これは言語使用の話ではあるが、子供が育った言語環境に関する事実なので、言語習得と密接に関係している証言だと思われる。

そして、現在においても、欧米系島民はコードスイッチングを行うことがある。さらに場面や相手による言語の使い分けもある。英語だけで話す場合 (英語しか話せない研究者と話す時など) と、日本語だけを話す場合 (日本語しか話さない観光客が来た時など) がある。しかし、英語と日本語はあくまでも第二言語、第三言語として習得しているのであり、最初に習得しているのは混合言語の様である。

6. 言語構造面

言語構造面から考えても、小笠原混合言語は単なるコード切り替えというよりも一つの言語体系を成していると言えよう。

まず、混合言語は2つの音韻体系を持ち合わせている。日本語の中に臨時借用語を取り入れるときに、英語など外国起源の単語でも日本語の音韻体系のまま (いわゆるカタカナ発音) で発音する。小笠原混合言語はそうならず、原音 (英語の音韻体系のまま) で発音される。日本語の部分も英語の音韻体系に沿った「外人なまり」ではなく、日本語のままである。

代名詞は内容形態素 (語彙形態素) と様々な違いを見せる機能形態素である (あるいはそれに近い)。代名詞を含めて機能形態素は普通は借用されない。いくら外来語好きで「忘れなようにリマインドしてください」や「私はその学会にあまりコミットしていない」のような内容形態素を連発している話者でも、英語の代名詞を使わないであろう。しかし、小笠原混合言語は日本語の述語と共に英語の代名詞が使われることがある。しかもそれは英語の文法的特徴である格変化 (I, me, my, mine) や単・複数形の区別 (we, us, our, ours) を持ち込んでいない。ただ単に「英語+日本語=小笠原混合言語」と言えない。これは英語にも日本語にもない特徴と言わざるを得ない。

小笠原混合言語では数字、助数詞 (classifiers) はほとんど英語起源のものであり、日本語のそれが極端に回避される傾向がみられる。これは例えば「あと about three kilos で sundown」(残り3キロのところで日が沈んだ) や「me らは one week ぐらいそこにいたよ」のように表れる。例から分かるように、日本語の場合、マルイチニチやツイタチ、ハツカ、ハタチ、トウカ、ニジュウイチニチ、シガツ、ヨネンマエなどのように時間関係のことばは数詞とからんでいる。これはヨンカゲツ (小笠原混合言語ならば four months という) だけではなく、シガツ (混合言語ならば April という) の場合も日本語なら数詞が用いられる。小笠原混合言語の場合は、数詞と直接関係のない「時間関係」の単語にまでこうした現象 (すなわち英語を使う傾向) が拡大しているようである。例えば、オトトイやサライネンよりも、day before yesterday や year after next が表れやすい。ときどき、筆者が小笠原混合言語について研究発表や講演を行なう場合、聴衆から「日本語の言い方が長いから英語が好まれるのではないか」と言われることがあるが、こうした例から分かるように (短い英語が採用されることもあるものの) 英語の方が日本語の表現よりはるかに長い場合にもそれが採用されていることがある実態が分かる。つまり、小笠原混合言語で選ばれるのはたまたま短い方になったり、長いものになったりするだけであり、長さは直接関係ないのである。

ネイビー時代は英語による教育を受けているから、専門用語をはじめとする「難しい単語」(専門用語までいかなくても非日常用語の単語) は英語のものが採用されるのではないかとよく聞かれる。これは事実である。つまり「難しい単語は英語から入っている」とは言えるが、しかし逆に、そうだからと言って「英語から入っている単語は全て難しい単語か」と言えば、そうではないのである。そもそも、上で紹介している day before yesterday や me は極めて日常的な単語であり、決して「学校教育によって覚えたから」英語のものが採用されているというわけではない。

小笠原混合言語は日本語が基盤言語 (matrix language) になっており、英語がその日本語の構造に埋め込まれている (埋め込み言語=embedded language) のである。しかし、だからと言って、「文法構造は日本語で、個別単語だけ英語」というわけではない。英語はむしろ、句 (phrase) や節 (clause) 単位で取り入れられることが多い。それはどうして特筆すべきことかと言うと、英語の部分が長いだけではない。英単語を正確な句・節に組み合わせるために文法的知識が必要である。例えば、「water が up to the knee だった」や「just the women が集まるようになった」といった発話がよく見られる。これらを日本語に置き換えると「水が膝まで上がってきた」、「女だけが集まるようになった」。混合言語はただ単に英単語を日本語の文に取り入れているだけではない。そもそも「ひざまで」と「up to the knee」では語順が違う (前者は名詞が先に来て、後者は名詞が後に来る)。混合言語を使うのに単語の知識だけではなく、こうした文法能力も必要である。さらに、英語では [up to] の複合的前置詞の使い方、そしてこの文法的環境において knee や women の両方の名詞には定冠詞の the が必要だと知

識もなければならぬのである。

日本人が英単語を（臨時借用語として）日本語の文に混ぜるときにこうした文法能力や知識が（個別単語として英語を取り入れているのであるため）不要である。また、単語ではなく、節や句単位で取り入れようとするこうした能力や知識が欠けているため、文法的に間違っただけの英語を生み出すのである。例を挙げよう。某コーヒーショップで見かけた看板に *Celebrating wonderful ten years in Japan* と書かれていた。言いたかったことは「日本（進出してから）の素晴らしい10年を祝って」であろうが、これは非文（文法的に間違っている）である。英語の場合に *wonderful* のような性質を表す修飾語と *ten* という助数詞が両方使われる場合、助数詞が先に来なければならない。このように語順に関する知識、複数形を使うべきか単数形を使うべきか、不定冠詞か定冠詞やゼロ冠詞のどれを使うべきかなどの知識は文法的知識である。英語の個別単語を日本語の文に入れるときにはこうした知識は不要だが、文（あるいは節、句）単位を入れるときは必要である。小笠原混合言語においてこのような語順の間違いは基本的には見られないのである。

7. まとめ

以上、言語意識面、言語使用面、言語能力面、言語習得面、言語構造面という五つの側面から、小笠原の欧米系島民の間で使われている日本語と英語が混ざっている話し方が言語であるのかを検討した。

その結果、その話し方は単なるコードスイッチング（ましては臨時借用語）とは言えないという結論に至った。その話し方が歴史的にどのように作り上げられてきたかということを見ると、バイリンガリズムそしてコードスイッチングは関わっていたであろうが（ロング 2002b）、現在において、それは一つの言語体系として融合していると判断せざるを得ないのである。

謝辞

本稿は2011年6月8日に政策研究大学院大学で行われた日本言語文化研究会第7回コロンビアで行なった講演に基づくものである。その際の活発なディスカッションに参加してくださった人への感謝の意を表わしたい。

注

- ¹ ピジンやクレオールは複数の言語が接触するときに見られる現象だが、コイナーとは同一言語内の複数の方言が接触する際に方言間の均一によって形成される新しい言語変種である。ネオ方言とは伝統方言と標準語との接触によって生じた言語変種である。
- ² 小笠原諸島への日本人による入植は1862年8月に一度行われたが、一年足らずで終わって日本人が引き上げた。日本人による継続的な定住は1876年から始まる。詳細についてはロ

ング&稲葉 (2004) を参照されたいが、本稿としては日本語が諸島に入ったのは「1860年代～1870年代」という大雑把な理解で十分である。

- ³ こうした「混合言語は自分たちの言語である」という意識を反映する証言に関してはロング (近刊) の第10章 (2.4節) の「小笠原混合言語の発生における子供たちの役割」を参照されたい。
- ⁴ 「日常語」=vernacular の定義の詳細や日本語訳についてはミルロイ (2000: 89-100) 参照。
- ⁵ 詳細や実例、島民の証言についてはロング (近刊) の第10章の3節「戦後の混合言語の特徴」を参照されたい。
- ⁶ 世間で「セミリンガル」と決め付けられているような話者。これについてはロング (2003b) 参照。
- ⁷ 明治や大正に使われた混合言語の前身については Long (2007: 93-95) を参照されたい。

参考文献

- (1) 田中慎也 (2005) 「英語教育教材の中の『見えない異文化』」『Janta News』日豪NZ教育文化学会、76、1-4。
<http://www.hino.meisei-u.ac.jp/janta/publications/JANTA_NEWS76.pdf>
- (2) ミルロイ、レズリー著、太田一郎、陣内正敬、宮治弘明、松田謙次郎、ダニエル・ロング 共訳 (2000) 『生きたことばをつかまえる 一言語変異の観察と分析』松柏社
- (3) ロング、ダニエル編 (2002a) 『小笠原学ことはじめ』南方新社
- (4) ロング、ダニエル (2002b) 「小笠原諸島における混合言語」『現代日本語の音声・語彙・意味・文法・談話における変異と日本語教育』科学科研費報告書、115-134。
- (5) ロング、ダニエル (2003a) 『日本のもう一つの先住民の危機言語—小笠原における欧米系島民の消滅の機器に瀕した日本語—』(「環太平洋の『消滅に瀕した言語』にかんする緊急調査研究」科研費報告書 A4-023)
- (6) ロング、ダニエル (2003b) 「バイリンガル —方言、コードミッキング、セミリンガルから「バイリンガル」をとらえ直す—」『月刊日本語』 90: 9
- (7) ロング、ダニエル・稲葉慎 (2004) 『小笠原ハンドブック』南方新社
- (8) ロング、ダニエル・橋本直幸 (2005) 『小笠原ことばしゃべる辞典』南方新社
- (9) ロング、ダニエル (2010) 「言語接触から見たウチナーヤマトウグチの分類」『人文学報』 428: 1-30。
- (10) ロング、ダニエル・今村圭介・新井正人 (2011) 「激動の20世紀を生きた小笠原諸島欧米系島民のオーラルヒストリー」『Ogasawara Research 小笠原研究』 36: 21-49。
- (11) ロング、ダニエル (近刊) 『小笠原における英語、日本語、混合言語 —欧米系島民が使う3つの言語—』
- (12) Bakker, Peter and Maarten Mous, eds. (1994) *Mixed Languages: Fifteen Case Studies in Language Intertwining*. Amsterdam: Institute for Functional Research into Language and

Language Use (IFOTT).

- (13) Long, Daniel (2007) *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*. Duke University Press.
- (14) Sampson, Paul (1968) The Bonins and Iwo Jima Go Back to Japan. *National Geographic*. July: 128-144.